

久留米シティプラザ ユースプログラム 2024

演劇鑑賞教室

新しい



事業報告書

2024年 5月26日(日) - 11月30日(土)

久留米シティプラザ

目次

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」	2
企画監修者としての総括	3
各回の記録	
前期	
1 2024年5月26日(日) イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える ～他人ごと、自分ごと～」・感想シェア会	5
2 2024年6月15日(土) 「ライカムで待っとく」鑑賞・対話の時間	7
後期	
3 2024年10月12日(土) イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～居心地のよい場所～」・感想シェア会	9
4 2024年11月30日(土) 「重力の光:祈りの記録篇」鑑賞・対話の時間	11
アンケートより	13
ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果	15
【寄稿】九州大学「身体表現演習特講／アーツマネジメント特論」との連携	20
【寄稿】学生が輝くときを見る:久留米大学文学部国際文化学科「文化と思想」との連携	22

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」

久留米シティプラザでは、2022年度より、「知る／みる／考える 私たちの劇場シリーズ」と題して、独自の視点で時代を捉え、表現方法をも模索し応答しようと試みる意欲的な作品を上演しています。2024年度は『ライカムで待ってとく』と『重力の光：祈りの記録篇』を上演しました。シリーズにあわせ、とくに次代を担う若者を対象に、作品鑑賞とアーティスト等との対話を組み合わせたユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」を行っています。

演劇は、娯楽として非日常の体験をもたらすものである一方、他者や社会との関わり方を学ぶツールでもあります。本プログラムは、演劇やアーティストを身近に感じてもらうことや、作品を通じて社会に目を向けること、対話や思考により視野が広がり、気づきが増えていくことを目的にしています。

事業概要

日 程	前期：2024年5月26日(日)、6月15日(土) 後期：2024年10月12日(土)、11月30日(土)
会 場	久留米シティプラザ Cボックス、小会議室ほか
企画監修	長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)
参加者	前期17名 後期23名
主催	久留米シティプラザ(久留米市)

※本事業は、九州大学芸術工学部、九州大学大学院芸術工学府および久留米大学文学部国際文化学科と連携し実施しました。

スケジュール

前期

2024年

5月26日(日) 13:15～16:45 インタロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～他人ごと、自分ごと～」・感想シェア会

6月15日(土) 13:00～16:15 「ライカムで待ってとく」鑑賞・対話の時間

後期

2024年

10月12日(土) 13:15～16:45 インタロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～居心地のよい場所～」・感想シェア会

11月30日(土) 14:00～16:45 「重力の光：祈りの記録篇」鑑賞・対話の時間

企画監修者としての総括

長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」は今年度で3年目を迎え、これまでの成果と新たな課題に向き合いながら進化を続けてきた。この3年間で合計111名の学生が参加し、特に令和5年度以降は、近隣の高校や大学等の教員の協力を得て授業を通じて広報が行われたことが、参加者の増加につながったと考えられる。

ユースプログラムは、久留米市における新たな演劇観客層の開拓を目的にした「知る／見る／考える 私たちの劇場シリーズ」に併走するプログラムとして位置づけられ、15歳から25歳までの若者を対象に、演劇の本質を体験する機会を提供している。久留米シティプラザは、これまで商業演劇やミュージカルといった話題作を上演してきたが、その観客層の多くは30代～60代の演劇愛好者に偏っていた。このため、社会課題に触れる作品を上演し、それに関連する事業を複数開催することで、新たな観客層の開拓を試みている。本プログラムの大きな成果の一つは、参加者の約9割が本事業を通じて初めて劇場に足を運び、初めて演劇を鑑賞したことだと考えられる。

また、本プログラムの大きな特色となりつつあるのは、文化施設が地元の大学と連携し、正規の授業科目として劇場体験を提供している点である。このアプローチは、学生が積極的に希望しなければなかなか参加しづらいインターンシップとは異なり、劇場と縁遠い学生たちにも参加の機会を提供していることが重要である。学生たちがすぐに他の作品の観客になるかどうかはわからないが、このプログラムを通じて、今後の人生の中で芸術活動に目を向ける選択肢を提供していることは、非常に価値のある取り組みだと言える。

さらに、このプログラムは、演劇作品を鑑賞するだけでなく、その見方の多様性を知る機会となっている。作品ごとに異なる視点や解釈が可能であることを学生たちに伝え、演劇が単なる観劇にとどまらず、深い対話と考察を促すものであることを実感する機会になっている。

これまでの成果としては、学生たちが作品を深く理解するためのプレクチャーと「対話の時間」を設けることで、単なる鑑賞体験にとどまらず、作品を通じて社会的・文化的な課題について考える契機となったことが挙げられる。

特に、観劇後の「対話の時間」では、参加者が自らの感想や思索を共有し、他者の視点に触れることで、演劇がもたらす気づきや発見を深めることができたように見受けられる。また、プレクチャーにおけるゲストの活動を通じて、学生たちは日常生活では触れる機会の少ないテーマに触れることができ、自己の社会的立場や視点を再考するきっかけとなった。これにより、演劇が提供する「他者の視点を知る」機会が、個々の学生にとって非常に貴重な経験となったことが伺える。

ただ、アンケートをもとにした今年度の反省点としては、プレクチャーの満足度が作品鑑賞まで持続しなかったことが挙げられる。特に、プレクチャーで得た面白さがその後の作品鑑賞体験に直結しなかった場合があり、参加者がプレクチャーと作品の間に乖離を感じているのかもしれないと感じられた。このことは、来年度に向けての重要な改善点であると認識しており、プレクチャーと作品鑑賞をより効果的にリンクさせるためのプログラムやファシリテーションの工夫が求められる。

次年度には、プレクチャーと作品鑑賞をよりシームレスに結びつけるために、鑑賞前後でのテーマごとの深掘りや対話の時間のあり方を再検討する必要がある。参加者が鑑賞体験と事前学習を一貫して感じられるような設計を目指していきたい。また長期的な課題としては、プログラムが観客層の形成にどうつながるかという点についても引き続き検討していく必要があるだろう。

本事業は次年度も継続すると伺っている。次年度も引き続き、この事業が若者にとって重要な芸術体験の入口となり、演劇や文化活動の価値を実践的に深く理解できる機会を提供していくことを目指し、さらなる工夫を重ねていきたい。ご協力いただいている関係各位に改めて感謝を申し上げますとともに、さらなるご支援をお願いしたい。

2024年5月26日(日)13:15～16:45

イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～他人ごと、自分ごと～」^{ひと}・感想シェア会

会場:【イントロダクション】スタジオ2 【プレレクチャー・感想シェア会】中会議室

進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ゲスト:中垣忠子(東国分校区 池の谷自治会 会長)・中垣昭生(東国分校区 池の谷自治会)

酒井咲帆(株式会社アルバス 代表、いふくまち保育園・ごしょがだに保育園 園長)

13:15 イントロダクション



長津氏から自己紹介とユースプログラムの簡単な説明、事業担当者から挨拶と企画概要の説明があった後、今の体調や気分によって4グループに分かれ、「他の人には他人ごとだけど、自分だけは自分ごとと思っていること」を話す。

「自分が興味あるもの・かわいと思うものについて、周りから理解が得られない」「自分の身体の不調は他人からしたらどうでもよさそう」「就活を経験する中で、いままでただ享受していただけの物事について『自分ごと』にしないといけなくなってきた」といった意見が出た。

これらの意見を並べてみて、他人ごとと自分ごとの差異について考えた。

14:30 プレレクチャー「劇場で考える～他人ごと・自分ごと～」

会場を中会議室に移し、一般参加者も交えたプレレクチャー。まず事業担当者からの挨拶と、進行の長津氏から企画趣旨の説明があった。

その後、近くの参加者同士で4人程度のグループをつくり、本日のプレレクチャーに来たきっかけを話す。話し合いでは、ユースプログラム参加者が進行役を担った。

5分程度話した後、本日のゲストによるレクチャー。



池の谷自治会で会長を務める中垣忠子氏と、同じく自治会所属の中垣昭生氏から、池の谷自治会における戦争遺跡の保護・活用の取り組みの紹介があった。

池の谷には戦争遺跡が多数あるものの、地域の人々の関心がほとんどなかったという。忠子氏が会長になって以降、防犯上の観点から、鬱蒼とした戦争遺跡をどうにかしたいという自治会内の意見を受け、学習会を実施した後、遺跡付近に説明板を設置。さらにはウォーキングイベントや、忠霊塔前での音楽会を行った。イベントを通して地域の人たちに知ってもらうだけでなく、動画配信なども行い、外に向けても情報発信を行っている。

約40年前に池の谷に移ってきた忠子氏は、次第に、戦争の犠牲の上に立って作られたこれらの遺跡をなんとか活用できないかと考えるようになったという。建造物の老朽化・風化を恐れて立ち入り禁止にするのではなく、活用して広く知ってもらうことが、後々の平和につながるのではないかと語った。昭生氏も、母の忠子氏のサポートを通して戦争遺跡について知っていくうちに、これらの建物の重要性を認識するようになったと語った。

<進行>



長津結一郎(ながつゆういちろう)

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走/伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なうほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにもかかわる。

<ゲスト>



中垣忠子(なかがきただこ)

約40年前から東国分校区に在住。池の谷自治会役員になったことをきっかけに、2018年度から戦争遺跡について地域住民の理解を深め、平和を語る場にするための取り組みを行う。東国分まちづくり振興会・久留米市文化財保護課と協力した勉強会や、案内板設置、戦跡めぐりウォーキング、音楽会の開催など、幅広い活動を継続して行っている。



中垣昭生(なかがきあきお)

池の谷自治会で「森の音楽会」などの企画運営に携わる。



続いて、福岡市中央区でいふくまち保育園・ごしょがだに保育園の園長を務める酒井咲帆氏から、活動の紹介。

写真家として活動し、その後自身で写真館を営むようになった酒井氏は、写真館の運営を「街の定点観測」と捉え、それを子どもたちといっしょに行いたいと考えようになった。教育と福祉の重要性を感じていた酒井氏は、「地球にいっしょに住んでいる」と感じられる保育園を、自分がいる場所(福岡市中央区)につくるための活動始める。

公園でラジオ体操を行っているうちに、町内会長の協力が得られるようになり、薬院に保育園をつくる。町全体を公園のようにたのしみ、子どもたちが街を自分ごとにしていくプロセスを通して、大人たちも街に居場所を作っていけるようになるのではないかと酒井氏は語る。地域に関わる上で、大きな変化がある場合には、「大事なことは何か」に何度も立ち帰り、変化のプロセスをきちんと開示することを大切にしているという。



ゲストの話の後、参加者同士でゲストへの質問を話し合う。「他人ごとだと思って活動に距離を取っている人との付き合い方は?」「問題意識を持って取り組んでいることに対して『意識高いね』などと揶揄されたりすることもある中で、モチベーションを保ち続けるには?」といった質問に対し、酒井氏は「こちらから積極的に関わりに行く」、忠子氏は「失敗を恐れない」、昭生氏は「『ありがとう』を次のモチベーションにする」と語った。最後に、6月に上演される『ライカムで待っとく』の紹介があり、プレレクチャーは終了。

16:20 感想シェア会

再びユースプログラム参加者のみで、本日の感想をシェアする。



「自分では『自分ごと』と思っていたけど、『他人ごと』に近かったのかなという気づきがあった」「自分ごとにするのがよくて、他人ごとなのは悪いことなのか?」「戦争遺跡のある町に住んでいたが、今日話を聞かなかつたら他人ごとのままだった」「自分が住んでる地域から始めるのが大事なのかなと思った」「自分の身に実際に起こってないからこそ他人ごとと思ってしまうが、何かしらの接点を増やし続けることが大事なのでは」といった感想が出た。

感想を受け、昭生氏は「遺跡の風化を恐れずに活用し続けることで、永く『遺す』ことにつながると思う」、酒井氏は「活動を続けていると本来の目的を忘れがちになるが、『本当に大事なことはなんなのか』を常に問うことが重要」と語った。

<ゲスト>



酒井咲帆(さかいさきほ)

2009年写真館『ALBUS』を福岡市中央区警固に立ち上げ、まちづくりを中心に活動の幅を広げる。2018年『いふくまち保育園』、2021年『ごしょがだに保育園』を福岡市中央区に開園、隣接する公園を整備・運営しながら、ひらかれた場所づくりを実践。2022年6月よりデザインの可能性を社会に実装していくプロジェクト「福祉とデザイン」を行う。

2024年6月15日(土)13:00～16:15

「ライカムで待っとく」鑑賞・対話の時間

会場:【「ライカムで待っとく」】久留米座 【対話の時間】中会議室

進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ゲスト:兼島拓也(劇作家・演出家)

13:00 「ライカムで待っとく」鑑賞



撮影:引地信彦

あらすじ

雑誌記者の浅野は、60年前の沖縄で起きた米兵殺傷事件について調べるようになったのだが、実はその容疑者が自分の妻の祖父・佐久本だったことを知る。調査を進めながら記事を書くうち、浅野は次第に沖縄の過去と現在が渾然となった不可解な状況下に誘われ、「沖縄の物語」が育んできた「決まり」の中に自分自身も飲み込まれていく……。

アメリカ占領下の沖縄で起こった米兵殺傷事件に基づくノンフィクションに着想を得て、沖縄在住の劇作家・兼島拓也が書き下ろし、沖縄に出自を持つ田中麻衣子が演出を手掛けた本作。「沖縄の問題」はなぜ「日本の問題」として語られないのかを問い直す。

15:15 対話の時間

冒頭、進行の長津氏から「この対話の時間は、結論を持って帰る場ではない。しゃべってもいいし、しゃべらなくてもいい時間をつくりたい。聞くだけの参加でも全然いい」という趣旨の説明があった。無理に感想を話させる場ではない、という空気を共有した上で、対話の時間が始まった。



最初に手を挙げた参加者からは、「感想を言葉にしづらい。沖縄の問題は、自分ごとじゃないように捉えてきたことを、演劇という直接的な表現を目の当たりにして、迫られたような感覚があった。重たい、苦しい、と感じた」という感想があった。他の参加者からは、「見ている最中に、『(感想を)しゃべりたくないな』と思った。それでも心に響いてくるものがあった。自分とは関係ないと思いついで安心感を覚えているのかもしれない。『ライカムで待っとく』(は)日本サイドから見た話だったけど、アメリカサイドから見たらどうだったんだろう」といった感想が上がった。

「沖縄の飲み会の楽しそうな雰囲気が伝わってきた」という、劇中のワンシーンの印象を語った参加者からは、「仰々しいことが起こるのではなく、楽しそうな飲み会のシーンなどを見ているうちに、気づいたら自分も当事者になってしまったように感じた」と、登場人物に自らを重ねた感想が出た。また、劇中に出てきた「境界線は内側にある」という台詞を挙げ、沖縄在住者の役を演じたのが実際に沖縄出身の人たちだけだったことを指摘する参加者も。



兼島拓也(かねしまたくや)

1989年沖縄県生まれ。2013年演劇グループ「チョコ泥棒」を結成、脚本・演出を担当。2022年『ライカムで待っとく』で第30回読売演劇大賞優秀作品賞受賞。同作で第26回鶴屋南北戯曲賞および第67回岸田國士戯曲賞の最終候補となった。

ある参加者は、「この作品を見た僕たちになにを感じてほしかったんだろう。沖縄のことを『自分ごと』にしている人たちが、他人に『自分ごと』にしろ、ということなのか？多少『憐れむ』という点で共感してもらうことを求められているのかどうかもわからなかった」と戸惑いを語った。劇中、同じく米軍の施設があった横浜との対比が描かれる箇所があったが、その部分に触れ、「『神奈川の人には大人だから』という台詞があったが、沖縄の人たちも諦めている部分があると思う。大人であるべきなのか。また、自分ごととして捉える=騒がないといけない、なのか？」と、姿勢の違いについて疑問を投げかける参加者もいた。

劇構造に関する感想も上がった。ある参加者からは、「最後にファンタジーの要素が入ってきてちょっと混乱した」と言いながらも、構造に絡めて「繰り返しの物語なのか？」という投げかけがあった。また、作品冒頭の、注目してみると引っ掛かりを覚える演技に気づいた参加者からは、「最初は演技が下手なのか？と思ってしまったが、あれは演出されたもので、ラストシーンにつながる伏線だったのかも」という感想が出た。こういった感想の流れから、参加者たちは「演劇で扱うことの必然性」について考えた。映画やドラマと分け隔てなく見ていたという参加者もいれば、本作は演劇でやるからこそ迫られるものがあった、「目撃者」になったという参加者もいた。

舞台美術に着目した参加者からは、舞台上に大量に設置してある段ボール箱の意味についての投げかけも。「沖縄に堆積されたものの象徴」であったり、「(劇中の台詞にあった)記憶のアーカイブ」であったりと、参加者それぞれが何かの隠喩として捉えていたようだ。



最後に本作を執筆した兼島氏から、「簡単に一言を言いつらい、拒むような作品としてつくったので、感想を言いつらいという意見が出てきてよかった。本作は自分の中でもひとつの線で貫かれておらず、矛盾している視点が随所に出ていると思う。人によって異なる見え方が聞けてよかった。家に帰ってからも何かしら思考が広がってくれたら作者冥利に尽きる」という感想があった。

今回のユースプログラムはメディアの取材が入っており、担当ディレクターの「メディアを通して沖縄ではない土地の若者が沖縄について考える姿を伝えたい」という想いから、プログラム内容に沿った撮影が行われた。この模様は7月に福岡のニュース番組で紹介された後、九州各局でも放送された。

2024年10月12日(土)13:15～16:45

イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～居心地のよい場所～」・感想シェア会

会場:【イントロダクション】小会議室 【プレレクチャー・感想シェア会】中会議室

進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ゲスト:江田由貴子(スナックうずしお主宰/作業療法士)

國武竜一(NPO法人ホームレス支援福岡おにぎりの会・ベイサイドコースリーダー)

13:15 イントロダクション



長津氏から自己紹介とユースプログラムの簡単な説明、事業担当者から挨拶があった後、シアターゲーム「ジップザップ」を行う。8つのルールにもとづいてパスを回していくというもので、参加者たちは徐々に緊張がほぐれていったようだ。

その後、3～4人のグループに分かれ、「居心地の悪い場所」について話し合う。もっとも居心地の悪いエピソードをグループ全員でストップモーションで再現、他のチームで当て合う。「美容師に話しかけられてもとっさに上手い答えが思いつかない」「初対面同士で沈黙が気まずい」など、誰もが共感を覚えるシーンが再現される。発表を終えた後、なぜそういった居心地の悪さを感じるのかを話し合う。「気を遣う」「疎外感を覚える」「気まずい」など、いくつかの要因が見えてくる。

これらを踏まえ、「居心地のよい場所」についても考えてみる。居心地の悪さを感じる環境と逆の意見のほか、「いい香りがする」「図書館」「海外」など、ユニークな意見も。「居心地の悪さを感じたら自分の意思で出られる」といった、この後のプレレクチャーにもつながりそうな意見も出て、イントロダクションは終了。

14:30 プレレクチャー「劇場で考える～居心地のよい場所～」

会場を中会議室に移し、一般参加者も交えたプレレクチャー。

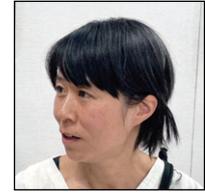
近くの参加者同士で、本日のプレレクチャーに来たきっかけなどを話し合った後、まずはホームレス支援活動を20年続ける國武竜一氏から活動内容の紹介など。



「自分の居住地が街か田舎か」「犬派か猫派か」といった問いかけから、國武氏は棄てられて野良猫化した猫の話始める。諸事情でペットが飼えなくなった場合、人気のない田舎の山や海のそばに棄てられることが多いという。ベイサイド(マリンメッセ近辺)に棄てられた猫は、近辺で野宿生活をしている方々が世話をしているようだ。

國武氏は、倉庫の軒下、公園の片隅、壊れた車の中など、とても居心地がよいとは言えない場所に暮らす人々が家を借りるための手伝いをしているが、彼らの中には「もうここ(路上)で死んでもいい」と言う人もいるという。彼らが自発的に自分のことを話すようになるまでには、1年以上の長い時間がかかる。20年にも及ぶ活動を通して、國武氏は「居場所」について、「場所がある」というだけでなく、話を聞いてくれる人がいる、他者の関わりがある場所を指すのではと投げかける。

<ゲスト>



江田由貴子(えだゆきこ)

2011年、JICA海外協力隊で作業療法士としてモンゴルに赴任。その後、JICA草の根プロジェクトでモンゴルやフィリピンの障がい当事者活動に関わる。帰国後、柳川市内で「多様性のあるまち」を目指して、障がい当事者や子育て仲間と共にイベントなどを通して場づくりを行う。コミュニティスペース「スナックうずしお」や「アートひろばやながわ」を主宰。



國武竜一(くにたけりょういち)

2004年より福岡市のホームレス支援活動にボランティア参加。本職はうきは市社会福祉協議会職員であるが、地域で排除、疎外され孤立しているケースに強く関心を持ち、他者との関りを拒んだり、交わりが困難な方に繋がるためには、またその心境が分かるにはどうしたらいいのか一縷の光明を得るために、20年来活動参加を続けている。



続いて、「スナックうずしお」や「アートひろばやながわ」を主宰する江田由貴子氏から活動の紹介。10代の頃、自宅が「居心地のよい場所」ではなかった江田氏は、20代でいろいろな価値観や考え方があることを知り、30歳のときに青年海外協力隊として2年間モンゴルに赴任。福祉の法律や制度が整ってはいないが、お互いに助け合うモンゴルの人々の生き方に感銘を受け、お互いが助け合えるコミュニティを作りたいと考えるようになる。

帰国後、柳川市内の商店街にある釣具屋の空き店舗をリノベーションし、外観はそのままに「スナックうずしお」を立ち上げ。自身の作業療法士としての経験を活かしながら、障害の有無や国籍に関わらずいろいろな人がそれぞれの立場から意見を言い合えるような場を作る。子どもをふたり産み育てる中で、うずしおの活動が難しくなってきた江田氏は、次第に「自分のライフステージに合わせた居心地のいい場所をつくろう」という考えにシフトし、「いろんな人にとって居心地のよい場所が、自分にとっても居心地のよい場所」と思えるようになったという。



両氏の話の後、「居心地の悪い場所」と「よい場所」を分けるものは何かについて参加者全員で考える。居心地のよさ・悪さを分ける要因のひとつに「その行為に本人の主体性があるのかなのか」ということがあるのではと投げかけた國武氏に対し、「居心地が悪いにも関わらずその生活を続けるホームレスの方々は、主体性があるといえるのか」という質問が出る。それについて國武氏は「選択しているようで『それしか選べなかった』という場合もある」と答える。江田氏も、モンゴルの遊牧民の例を挙げ、「選択できるかどうか重要」と語る。

最後に11月に鑑賞する「重力の光」に向けて、「鑑賞を通して、各自が“次につながる何か”を考えてほしい」などのメッセージをもらい、プレクチャーは終了。

16:20 感想シェア会

再びユースプログラム参加者のみでグループに分かれ、感想シェアと質疑応答。



20年以上支援活動を行う國武氏に「そのエネルギーがどこから来るのか」と質問があり、國武氏は「実は支援と思っておらず、友達に会いに行っていると思っている。楽しいから続けている」と答える。

「うずしお」という名前に込めた思いや、どうやって運営してきたかを質問したグループに、江田氏は「渦潮のようにみんなが巻き込まれていくイメージ。公的なお金をもらおうと制限も出てくるため、自費でまかなえるよう工夫してきた」と回答。また、江田氏と同じく自分も自宅が居心地が悪いと語った参加者に対し、「たくさん葛藤してきたことが、その後の人生に生きてくる」と語った。

2024年11月30日(土)14:00～16:30

「重力の光:祈りの記録篇」鑑賞・対話の時間

会場:【「重力の光:祈りの記録篇」鑑賞】Cボックス 【対話の時間】小会議室

進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ゲスト:石原 海(映画監督・アーティスト)

14:00 「重力の光:祈りの記録篇」鑑賞



画像:石原海<重力の光>2022

「重力の光:祈りの記録篇」について

困窮者支援を行うNPO法人抱樸(ほうぼく)の奥田知志が牧師を務める福岡県北九州市の東八幡キリスト教会には、様々なバックグラウンドの人々が集まっている。フィリピンで戦争を経験した人、5回の服役後極道から足を洗うも世間につまはじきにされた人、妻と子供が出ていき、自暴自棄になって多額の借金を背負った人、路上生活をしながらも食える程度の稼ぎを得ていたが、時代の流れの中でそれすらまもなくなくなった人、親や周りの大人たちに殺すぞと毎日言われ続けた人、生きるのが苦しく、「早くいなくなりたい」と願っていた人……本作は、教会に集う傷ついた愛すべき罪人である9人が演じるイエス・キリストの十字架と復活を描いた受難劇と、彼らが歩んできた苦難と現在の物語、礼拝の模様や支援活動、それぞれの日常を交差させた実験的なドキュメンタリー映像作品である。

<ゲスト>



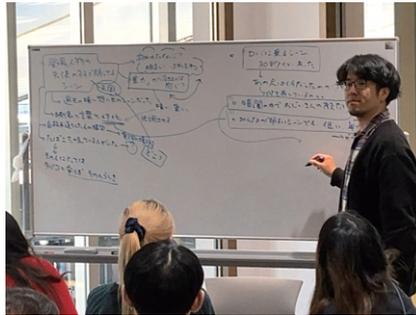
石原 海(いしはら うみ)

ロンドンと東京を拠点にする映画監督／アーティスト。コミュニティ、そして社会から疎外された人々を描くことを主なテーマに、個人的な記憶と社会問題を織り交ぜた物語ベースの制作をしている。

15:30 対話の時間

会場を小会議室に移し、感想を共有する対話の時間。

進行の長津氏から、この時間について「すぐに感想を言葉にするのが難しい作品だったと思うが、大事にしているのは、他の人がどう思ったのか、その感触を共有すること。見方の違いを受け止める時間にしたい」という趣旨の説明と、この場には監督である石原海氏もオンラインで同席しているとの説明がある。



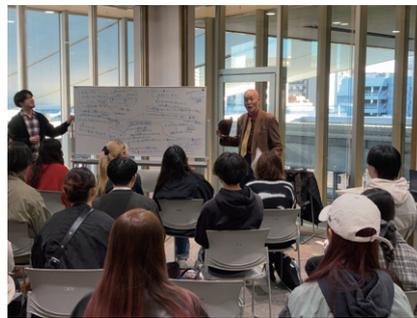
まず最初に挙げたのは、たびたび差し込まれるフィクションのようなシーンについての感想だった。「重力の光」は基本的にドキュメンタリータッチで進行するが、途中、天使の羽のようなものを身につけた登場人物たちが、屋外で自由に踊るシーンが挟まる。このシーンについて、ある参加者は「(その登場人物が精神的に)救われたというイメージ」として受け取ったようだ。「登場人物のひとりが“重力が息苦しい”と言う場面があったが、その重力から自由になったシーンだと感じた」と語る。

また、このシーンの「明るさ」について触れる参加者も。「暗いことを語っているのに、映像は明るかった」との指摘に、「語っている内容の暗さと対照的に、救われたことをあえて強調するために明るくしているのでは」という意見があがった。

そのほかにも、「男性がロバに乗って駆け抜けるシーンが長かった」「暗闇の中で男性がこっちをじっと見ているシーンが怖かったが、どういう意味だったのか」「明るいシーンでもBGMが不気味だったのはどういう意図なのか」といった、シーンの意図についての疑問は多くあがったが、感想は出てこなかった。そこで、近くの4～5人でグループになって、疑問や感想をシェアしあう時間を取った。

グループで話すことで、参加者たちから少しずつ、感じたことが言葉になって出てきた。ここで進行の長津氏から、10月のプレレクチャーのテーマであった「居心地のよい場所」と絡めてなにか感じたことはないかという投げかけがある。

参加者たちはみな、本作の舞台である教会について考えを膨らませたようだ。「教会には血のつながりのあるひとはいないけれど、自分のことをわかるまで寄り添ってくれた人たちがいた。それで居心地がよかったのでは」と語る参加者や、「自分と同じような境遇の人が周りにいたら居心地がいいと感じるのかもしれない。自分は彼らのようなつらい経験をしたことがないので、逆に気を遣ってしまうかもしれない」「キリスト教を信仰することで、より居心地のいい場所になったのだと思う。自分にとってそれ(自分が信じるもの)はなんなのか」と語る参加者もいた。



ここで、これまでの様子を後方から見ていた菊川清志氏が登場。「ホワイトボードに書かれたことは、すべてが聖書と一致する。この作品は生きてるってすばらしい、というのをテーマにしている。命の尊さをひとりでも多くの人たちにわかってもらいたい」と語った。参加者が疑問に感じていたシーンの意図についても触れ、最後に「私たちのように、助けてもらったなら、今度は助ける側に回ってほしい」と話した。



続いて、オンラインで参加していた監督の石原氏が画面越しに話す。「生きづらいという自分の感情は、自分の責任ではなく社会の責任なのではないかと思うようになった」と、本作を撮ることになった経緯や当時感じていたことについて語る。自分だけの問題だと思っていたことを、より大きなものと接続したいと思ったことが、本作を撮る動機になったという。

そのほかにも、参加者が疑問に感じたシーンについて具体的な回答や解説をおこなっていく石原氏。本作がドキュメンタリーだけではなくフィクション的な要素も併せ持つことについて、「普段アートの文脈で映像をつくっているため、テレビ番組などで見られるドキュメンタリー作品にあまりないような要素を入れたかった」と語った。

また、普通に生きていると重力によって自然と下に引っ張られる世界で、その重力から浮かび上がれるのが天使なのではないかと考え、モチーフとして扱ったという。そこからタイトルに繋がる体験なども話し、参加者は本作についての理解が深まったようだった。

予定の時刻となり、対話の時間は終了。終了後もオンラインで言葉を交わす石原氏と菊川氏や、その様子を引き続き見ていた参加者もいた。なかには最後まで残って自分の現状や考え、感想などを石原氏に投げかける参加者もいた。



菊川清志(きくかわきよし)
鑑賞のため来場され、飛び入りで対話の時間に参加。「重力の光」ではイエス役で出演。

「ライカムで待っとく」感想抜粋

やはり終わっても、感想を言葉にしたいという思いが残りました。沖縄の物語が身近になったとはいえ、やはり自分ごとにしていいのか、自分ごとと置いていいのかという疑問が残っています。答えは出ませんが、考え続けようと思いました。

舞台を観るまでは、単純に自分ごとと他人ごとについて考えられていました。言語化してしまうと泣いてしまいそうで、悔しくて怒りが沸いていました。なぜか命の危険を感じました。なぜか辛くなりました。なぜ当事者にするのだと、おそれが出ました。舞台が終わり、拍手をしたくないと思ったのは初めてでした。拍手をして彼らに同意したくありませんでした。苦しかったです。人を殺すことが軽いものに見えてしまいました。そんな側面が自分に來ることがとても残酷で嫌でした。苦しいです。本当に自分にとって難しいものでした。

いろいろ考えるきっかけを頂いた機会だった。ただ問題を自分事として捉えるのはまた別の次元の話だと感じている。でもどの情報を伝える手段(映画や講義など)よりも自分の中に入ってくる感覚がある。演劇って面白いなと思いました。

前回自分ごと、他人ごとについて考え、無理に他人ごとを自分ごとにする必要がないと感じたのですが、そのことによって人を傷つけることがあるのが危険だなと感じました。傷ついた人が怒るのではなく、諦めになる(今回の沖縄の人)と、そもそも対話することも信頼を得ることも不可能となるので自分ごとにはできなかったとき、どうしようかと思いました。

演劇を見てもなかなか感想が浮かびづらかったり、次の行動に移したりというのが難しいが、観る前と確実に自分が変わるような経験であった。劇場という場が新たな価値観が交わる場だと身をもって実感した。



KAAT『ライカムで待っとく』@神奈川芸術劇場 中スタジオ 撮影:引地信彦

「重力の光：祈りの記録篇」感想抜粋

題材のテーマが重たく考えさせられました。作品を見て、正直共感できるところがあまりなくて、グループで話し合いをしているときも、「テーマが重たくて話せることがない」という意見がありました。そう思うと、この作品に共感できないってとても幸せなことなんだなと思い、自分がいままで幸せであったことを気付かされました。

「重力があるから少しでも気を抜くと落ち込んでしまう」という言葉が特に心に残りました。私はよく人に「人生楽しそうだね。楽しそうだね」とよく言われますが、それはいつも気を張ってたりするだけなので、この言葉に少し救われました！

この映画を観た感想として、マイナスをプラマイゼロに見なしてくれるような人が必要なんだなと思いました。一人でいるとマイナスなことを忘れることはできても、プラスに転じることはないと思うので、前述した人たちがいるところで交流することで、初めてプラスに変わると考えました。

映画を観ている中で、感じたことをみんなで共有する時間で、自分とは違う感じ方を知ることができて、すごく良い経験ができたなと思いました。聖書は読んだことがなかったのですが、どこか自分のことを感じたり、誰かのことを思い出したり不思議な感覚でした。自分の信じてるものだったり、居心地の良い場所だったりたくさん考えることができました。

居心地の良い場所という視点からこの作品を見たときに、登場するみなさんの希望、光となる場所が教会だったのかなと思いました。赤ちゃんが抱かれているところを見るとイライラしてしまうという過去を持つ女性は、大人に愛されなかった過去が頭によぎってしまうからなのかなと思いました。良い大人なんていなくて、みんな裏切ってしまうものだと言いつつ、そんな大人に巡り会いたいという諦めきれないものがあつたと思います。女性のように人生でなんとなく諦めてしまっていたことが、教会の人々と出会うことで叶って、そんな人々がいる教会という場所が自分にとっての居心地の良い場所につながったのかなと思いました。生きていく中では、楽しいことを一緒に楽しめる人と同じぐらい、苦しいときに悩みを共有できる人も必要なんだなと思いました。



石原海〈重力の光〉2022

ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果

ユースプログラム参加者には毎回のプログラム終了後にアンケートをとった。ここではそのアンケートのデータを用いた分析を紹介する。

アンケートは各回ごとに取り、延べ回答数は前期で33件、後期で40件あった。アンケートは自由記述のほか、以下の項目に対してそれぞれ5段階評価をしてもらった。

- Q1 参加した内容に満足した
- Q2 芸術作品への興味関心が高まった
(5/26は「演劇作品「ライカムで待っとく」と明記、11/30は「芸術作品や芸術家(アーティスト)」とした)
- Q3 久留米シティプラザの企画への親しみが増した
- Q4 新たな気づきや発見があった
- Q5 対話することが楽しくなった
- Q6 地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった

全体的な満足度

まず全体のアンケート結果を平均すると、図1-1、図1-2のようになった。

図1-1

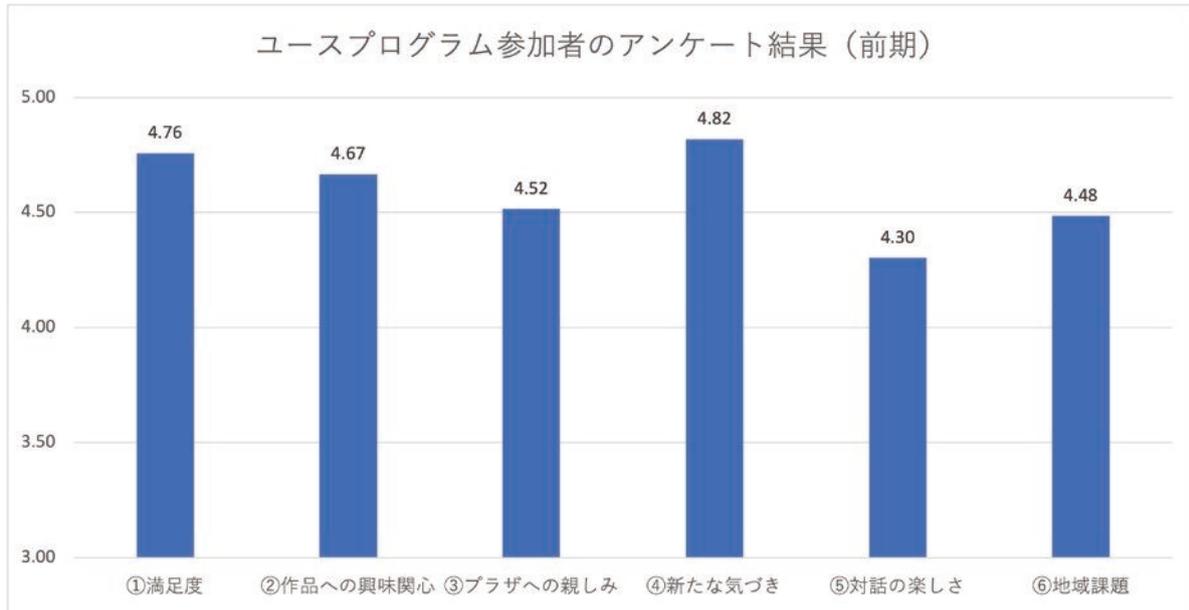
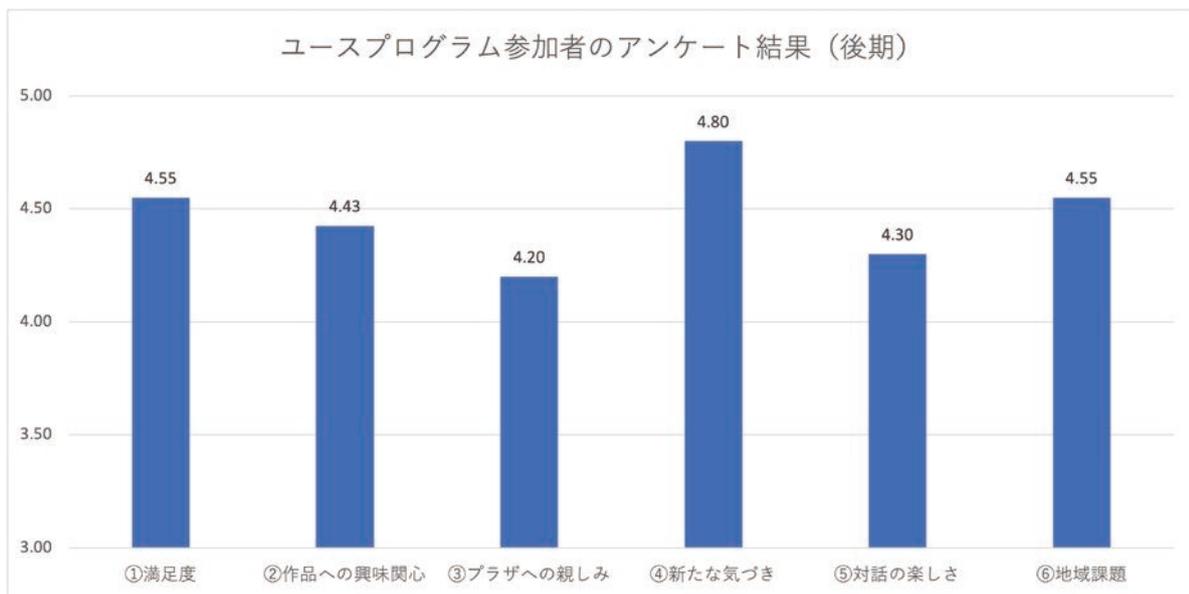


図1-2



このことから、「新たな気づきや発見があった」「参加した内容に満足した」といった項目は前期・後期ともに高く評価されていることがわかる。全体的に前期に比べて後期がポイントを落とした一方、「地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった」という項目については前期に比べて後期がややポイントを上げたことがわかる。ただしいずれも4.0を超えていることから、総じて今年度の事業に関する満足度は高かったことが伺える。

次に、各回答の平均の推移を期ごとにまとめた。

図2-1

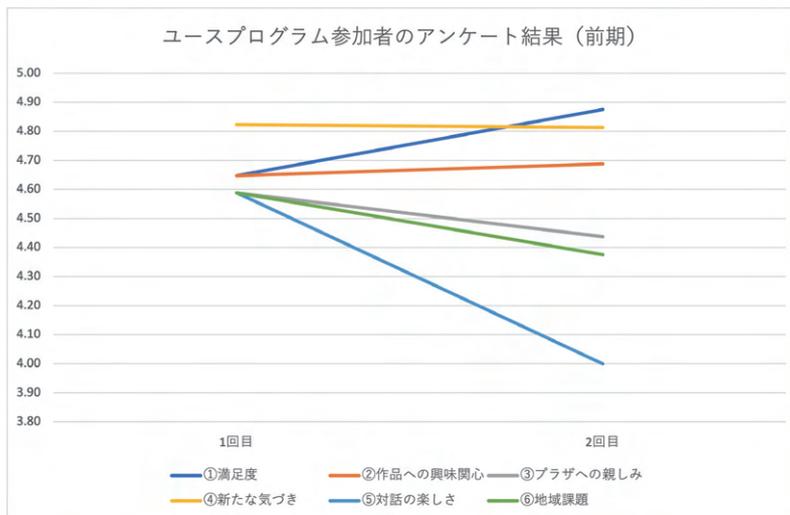
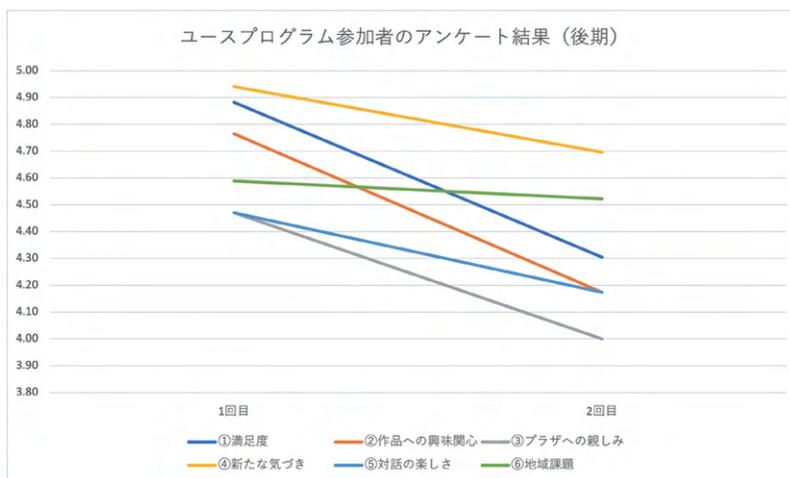


図2-2



この結果からは次のようなことがわかる。

○前期

- ・ 「参加した内容に満足した」については、1回目と比べて2回目が格段に上昇しており、「芸術作品への興味関心が高まった」についても上昇傾向が見られる。
- ・ 一方、「対話することが楽しくなった」の項目については2回目に著しく減少傾向にあり、「久留米シティプラザの企画への親しみが増した」「地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった」という項目についてもやや減少した傾向にある。

○後期

- ・ 全体的に1回目に比べて2回目が減少傾向にある。特に「参加した内容に満足した」「芸術作品への興味関心が高まった」の項目については大きく減少傾向にある。

このことから、いずれの期も満足度や気づきや発見の度合いが高いものの、公演を実際に鑑賞したうえでのプログラムにおける満足度やそれ以外の項目には前期と後期で温度差がみられた。前期については平均的な満足度が上昇し、作品が新たな気づきや発見を促すような契機となっていた一方で、対話することの「楽しさ」を創出したものではなかった。後期についてもプレレクチャーでは一定程度の満足度や効果を生み出していたことがわかるが、実際の作品鑑賞・参加においてその効果が十分に継続していなかったこともわかってきた。

自由記述から見た考察

最後に、毎回のアンケートにおける自由記述をもとに、前期と後期のプログラムの特徴を要約し検討する。

○前期

プレレクチャーについて、まず戦争遺跡についての話では、自分の地元にも戦争の痕跡があることを知り、それまで遠い歴史として捉えていた戦争が、自分の暮らす土地と結びついていることに気づいたという声があった。「人の記憶がなくなり、物がなくなると人は過ちを繰り返す」という言葉が心に残り、過去を継承する意義を強く感じた参加者もいた。一方で、戦争の悲惨さや平和の大切さを理解していても、体験していない分、語り手が持つ課題意識と同じ熱量で共感するのが難しいという率直な意見もあった。

保育園については、すでに関心がある人にとっては「自分ごと」としてすんなり受け止められたが、関心がなかった人にとっては、話を聞くことで初めて「自分ごと」に変わるきっかけになったことが伺えた。保護者や地域の関わり方が子どもたちの環境に大きく影響することを知り、「誰が関与するか」によって見え方が変わることを実感した参加者もいた。また、日常的に関わるテーマほど「自分ごと」になりやすいのか、それとも、話を聞いたことで自分と遠い問題との間にギャップを感じ、その差を埋めようとする中で「自分ごと」になるのか、という点も指摘された。

関心の有無や経験の有無だけでなく、語りや対話を通じて、物事の見え方が変化することがある。「他人ごと」と思っていたことが、語りの場を通じてふと「自分ごと」へと変化する瞬間を、多くの参加者が体験したことが伺えた。演劇『ライカムで待っとく』は、多くの観客にとって単なる観劇体験ではなく、深い問いを投げかける場となった。観劇前と後で「確実に自分が変わった」と語る人がいる一方、言葉にすることが難しいと感じた人も多かった。沖縄の歴史に触れ、これまで「他人ごと」だったことが「自分ごと」として迫ってくる感覚を得た人もいれば、自分ごとにするべきなのか迷い、言葉を発することをためらった人もいた。

「平和のための犠牲とは何か」という問いが心に残り、沖縄の人々が抱える感情をどれほど理解できたのか、自問する声もあった。特に、歴史的な文脈を知らなかった人々にとって、「何も知らなかったことにすら気づいていなかった」という衝撃は大きく、隠されることと忘れられることの違いについて考えさせられたという感想もあった。同じアメリカ人として、作中に登場する人物の行動に「恥ずかしさ」を感じたという声もあり、個人のアイデンティティと歴史が交差する場面もあった。

また、演劇が他のメディアとは異なり、観客の内面に直接入り込む表現であることを実感したという意見も多かった。映画や講義と比べ、観る側が当事者として巻き込まれる感覚があり、それが「自分ごと」として受け止めることの難しさや危うさにつながると考えた人もいた。さらに、観劇後の対話の場が、感情を整理し、他者の視点を受け入れる契機になったと感じた参加者もいた。

なかには、怒りや悲しみを言葉にできず、「拍手をしたくなかった」と語る人もいた。作品を通じて、自分の中に生まれた「苦しさ」を直視せざるを得なかったという率直な声もあり、演劇が持つ力の大きさがうかがえた。対話を通して少しずつ理解を深め、今後も考え続けていきたいと感じた人が多く、この作品が投げかけた問いは、観劇の瞬間だけでなく、その後の時間にも影響を与え続けている。

○後期

プレレクチャーにおいては、日常ではあまり触れる機会のないテーマだったこともあり、「普段考えることのない話を聞くことができた」「ホームレスについて学ぶ機会がほとんどなかったので興味深かった」といった声が多く聞かれた。話を聞く中で、自分自身の「居場所」について改めて考えたという参加者もいた。普段は無意識に感じている「居心地の良さ・悪さ」について、他者の視点を通じて考えることで、「居場所」そのものの意味を捉え直す機会になった。特に、支援活動を「楽しい」と捉え、日々のルーティンとして関わる人の話が印象的だったという感想もあり、「支援=大変なもの」という固定観念が揺さぶられたと感じた人もいた。また、「本当はやりたいたいことがあっても、現実的に考えすぎて動き出せないことがある」という言葉に共感する人も多く、支援の現場に携わる人々の自由な発想や行動力に刺激を受けたという声もあった。対話の場があったことで、「自分の生きる社会以外のことにも興味を持ちたい」と考えたり、「シティプラザでの企画に積極的に参加したい」と新たな行動につながるきっかけを得た人もいた。

映画『重力の光：祈りの記録篇』については、登場人物の多くが「死」を考えた経験を持ち、その背景が語られる場面は、観る人にとっても決して他人ごとではなかった。過去にうつ病と診断され、苦しんだ経験を持つ観客が「自分だけではない」と感じるきっかけになったという声があり、作品が観る側の人生とも交差していたことがうかがえた。また、「重力があるから、気を抜くと落ちてしまう」「週に一度の祈りの時間は、一瞬だけ光が差す」という言葉が特に印象に残り、自分自身の生き方を振り返る契機になったという感想もあった。映画の中で、教会が「居場所」として機能していることに注目した人も多かった。愛される経験が乏しく、大人を信じられなかった女性が、それでも「信じたい」という思いを抱き続ける姿に、諦めきれない希望を感じたという声があった。また、社会の中で傷つき、生きづらさを抱える人々にとって「自分をさらけ出せる場所」があることの重要性を改めて考えさせられたという意見もあった。一方で、映画に登場する教会のような場所を「自分にとっては居心地の良い場所とは思えなかった」と語る人もおり、居場所の在り方が人によって異なることを実感する機会にもなった。この映画は、観た直後には言葉にしづらい作品だったと感じる人も多く、対話の時間がその理解を深める大きな助けになった。宗教的な視点が自分の考え方とは異なるものだったとしても、命の大切さや、他者に寄り添うことの意味を考える機会になったという声もあった。

「人生を振り返り、命を粗末にしないようにしたい」と決意を新たにする人もいれば、「救われる人がいる一方で、救われない人もいるのではないか」と問い続ける人もいた。上映後の対話を通じて、他者の視点を知ることによって、自分の考えが整理され、より深まったと感じた人も多かった。

九州大学「身体表現演習特講／アーツマネジメント特論」 との連携

長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

今年度も引き続き、九州大学大橋キャンパスでの教育カリキュラムとユースプログラムとの連携を行った。一昨年度は大学院修士課程の学生を対象にしたプログラムであったが、昨年度より学部組織である芸術工学部の学生も加わり、より広範な学生層を対象にプログラムを実施した。学部と大学院それぞれの教育ニーズに応じた内容を提供し、「臨時授業科目」として「身体表現演習特講」「アーツマネジメント特論」を開講した。

昨年度の報告書で記載した通り、学生たちが単にユースプログラムを体験するだけで終わらないように、学生たちが学びを実践に結びつけられるようにプログラム内容を構成した。特に、ユースプログラム終了後には学生が自らの学びを振り返る時間を設けるとともに、自分だったらどのような企画をラーニングプログラムとして立案するかというアイデアを交換し合うことを通じて、得られた知識や経験をより意味のあるものにすることを目指した。

今年度ユースプログラムとして参加した「ライカムで待っとく」という作品は、初めて演劇を見る立場にとってはとっかかりが多く、テーマの重さとともに理解しやすい作品であったと考えられる。また、この件に関してテレビ取材も行われ、学生たちがメディアに登場する機会を得た。この経験は学生たちにとって非常に貴重であったと考えられる。たとえば、メディア露出を通じて学生たちが自分の活動を表現する機会を得ることができたことは重要である。テレビカメラの前で自分の言葉や考えを伝える経験は、学生たちにとって非常に新鮮で、自信を持つきっかけとなったのではないかと思われる。また、自らの活動が社会にどう影響を与えるのかを実感する機会にもなっただろう。

一方、取材やカメラが入ることによる緊張やプレッシャーに困惑している学生も見受けられた。作品のテーマ自体が沖縄を取り巻く複層的な社会問題に対して「内地」に暮らす人々がどのような態度を取るかを扱っていたため、どのような態度でこのことに向き合うべきかということは、より繊細な態度表明が必要となっていた。カメラの前で意図しない反応が撮影されることに不安を感じた学生もいたことが想定される。ただ、このような経験を通じて、学生たちはメディアとの接し方や自己表現の方法について新たに学び、実社会での今後のキャリアにおける示唆を得られたように感じられた。

また、今回プレレクチャーに登壇したゲストの活動に興味を持った学生が、その後の卒業論文のケーススタディとしてその活動にフィールドワークを始め、実際に卒業論文を執筆したという嬉しい驚きもあった。

今年度のユースプログラム終了後に提出された学生たちのレポートは、プログラムを通じて得た学びの多様性を反映している。レポート課題のテーマは、今回上演した作品ではない任意の作品を選び、

そのラーニングプログラムを考案するというものであった。

ある参加者は、作品を見ることで地元の歴史を学び、その背景に触れることで地域社会とのつながりを深めるためのプログラムを提案した。演劇を通じて歴史を学ぶことがいかに効果的であるかを実感し、その体験が地域社会への理解を深める契機となり得ると提起した。

また別の参加者は、哲学を題材にした演劇の公演を通じて、演劇がいかに観客に深い思索を促す力を持ち得るかにチャレンジする企画を提案した。演劇が単なる娯楽にとどまらず、哲学的な対話を生み出す場であることを実感し、その深いメッセージに触れることで、自分自身の視野が広がったと話していた。

さらに、舞台制作の裏側を学ぶことを通じて、演劇がどれほど多くの人々と技術によって支えられているかを再認識する企画を提案した学生もいた。舞台美術や演出の細やかな工夫が観客の体験にどれほど影響を与えるかについて深く考察し、その経験が演劇への理解を大きく深めるものであったと感じていたようだった。

今年度のプログラムを通じて学生たちは、演劇や文化活動に対する理解を深め、実践的な学びを得られたのではないかと思われる。一方で、今後のプログラム運営においては、学生たちがより安全に自己表現できるような場づくりのサポート体制が求められると感じた。また、学生たちが自らの学びをより深く振り返り、次のステップにつなげられるよう、プログラム後のフィードバックや振り返りの時間を充実させていきたいと考えている。

来年度も引き続きユースプログラムとの連携を実施し、学生たちが実際に体験を通じて学びを得られるように工夫を重ねていきたい。このプログラムを通じて、学生たちが芸術活動の価値を実践的に深く理解できる機会となるよう、引き続き努めていきたい。

学生が輝くときを見る： 久留米大学文学部国際文化学科「文化と思想」との連携

田中 優子(久留米大学文学部国際文化学科准教授)

久留米大学文学部国際文化学科がユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」と連携はじめて3年になる。昨年に引き続き国際文化学科開講科目「文化と思想」で連携をおこなった。筆者もゲストスピーカーの選定等の準備段階から関わりながら、プレクチャーと作品鑑賞、それぞれの後に行われる感想シェア会および対話の時間に参加した。最終的に単位認定まで行った学生は、2年生15名(男子3名、女子12名)、3年生5名(男子2名、女子3名)の計20名であった。

本稿のタイトルは、清水真砂子氏のエッセイ『学生が輝くとき』に着想を得たものである。これは、アーシュラ・K・ル＝グウィン『ゲド戦記』の翻訳をはじめ、多くの執筆活動を行う清水氏が、青山学院女子短期大学の教員として学生と過ごす日々についてつづったものである。2024年度、ユースプログラムに参加する久留米大学の学生の様子をみながら、筆者はこの本のタイトルを思い出していた。新明解国語辞典第八版によると、「輝く」には「その状態がすばらしく(晴れがましく)見える。」という意味がある。筆者には、学生が「すばらしく」「晴れがましく」見えたのだ、という所感を持ったことを述べたうえで、今年度のプログラムを振り返ってみたい。

10月12日は、まず九州大学の長津結一郎氏が進行する1時間ほどのイントロダクションに参加し、その後場所を移動して、一般の参加者と一緒にプレクチャー・感想シェア会に参加した。イントロダクションの中で、「居心地の悪い場所」とは何かについてグループで話し合い、それを全員の前で言葉ではなく体をつかって表現する、ということを行った。大学で普段、今回の参加学生たちが何かを演じたり、体で表現したりする様子をあまり見ることがないのだが、この場で、学生たちは状況をわかりやすく、そして少しくすっと笑える要素もいれつつ、とても上手に表現していた。中でも、「知らない人ばかりの前で派手に転んでしまった場面」を演じた学生たちについては、派手に転んだ役の学生は、右肘を床について倒れこみ、左手は天井方向へ挙げたままにしていたので、オーディエンスに気まずそうにしている顔が見えるようになっており、その恥ずかしさがよく伝わってきたし、周りでその様子を傍観する役の学生たちも、腕組をしながら携帯電話を操作しつつ、冷たい視線を転んだ学生に送っている等、とてもリアリティがあった。発表グループ以外の学生たちはその様子から、どのような居心地の悪い場面だったのか、をあてるのだが、とても嬉々としていた。「居心地の悪い場所や場面」は居心地が悪いのだが、それについて語り、表現し、気持ちを共有するのは案外楽しい、ということを経験しているようだった。

プレクチャーでは、國武竜一氏と、江田由貴子氏のお話を聞いた。その後の感想シェア会では、一般の参加者による質問に混ざり、ある男子学生が手を挙げて質問をしていた。彼は、國武氏が、「主体的であればあるほど居心地がよくなり、お客さま(客体的)でいると居心地が悪くなる」と話されたことに対して、「ホームレスの方々は、夏など明らかに住みづらい(居心地が悪い)のに、路上に住んでいるので、彼らは主体的に活動されているのか、客体的に活動されているのか気になりました。」とコメントしていた。國武氏がいう「お客さま(客体的)でいると居心地が悪い」というのは、ボランティア活動などにおいて、それを強いられて仕方なく活動する人の様子を形容していると思われるので、この学生のいう「ホームレスの方の主体性/客体性」という議論はそこからずれているようにも思われるのだが、彼は

「主体か客体か」について、いま聞いた内容を彼なりに咀嚼し、疑問に思い、勇気をだして手を挙げて質問をしている。この男子学生をはじめ、他の参加学生たちも、教室ではそこまで積極的に手を挙げる方ではない学生は多い。しかし、レポートで「人と意見を交換するのも楽しかった」「少し自分の生きる社会以外でおきていることに興味を持つようになった」と書く学生がいたように、プレクチャーと感想シェア会で他の大人たちと交流することは、彼らだけのコミュニティから一歩外に踏み出すきっかけになっているようだった。

11月30日は、はじめにCボックスにてドキュメンタリー映画「重力の光：祈りの記録編」を鑑賞し、その後場所を移動して対話の時間に参加した。対話の時間には、監督の石原海氏がオンラインで参加され、映画で主演された菊川清志氏も会場にて同席されていた。映画「重力の光」は、東八幡キリスト教会に集う、さまざまな背景を持った人々がイエス・キリストの受難劇を演じ、その途中で自らの過去を語る場面が出てくる。中には、「私はここまでつらい経験をしたことがないので…」と発言する学生がいたように、作中に自己を投影できる登場人物は少なかったようで、彼らにとっては内容を深めるところまでたどり着くのは難しかったのかもしれない。とはいえ、対話の時間では、「ここはこういうイメージなのかと思った」「あのシーンは何であんなに長かったのだろう」等、主に演出の手法について思い思いにコメントをしていた。その中で、ある女子学生が「自分の信じるものって何なんだろうなと思った」というコメントをしていた。彼女は後のレポートでも、自分が「信じること」に慣れていないので、「宗教」「信仰」が身近に感じられないのだろうと書いていた。映画に出てくる方々が、東八幡キリスト教会で受け入れられ、そこからキリスト教への信仰へとつながっていった様子を、少し遠い場所での出来事のように感じつつも、「何を信じるのか」の前提である「信じるとは何か」を思索している。彼女は普段から積極的に発言するタイプの学生で、今回の対話の時間でも何度も手を挙げて発言をしていた。外へ外へとでていくことが得意な学生も、自分の内面の深いところへと思いをめぐらせる機会になっていたことがわかる。

大学の教室内で、学生からコメントを引き出すことはなかなか難しい。クラス全体に向けて、何を考えたのかたずねてみるが、誰からも手が上がらないことは少なくない。しかし、今年度のユースプログラムで筆者が目にした学生たちは、たどたどしくも、何か発言しようとしていた。普段の教室よりもよほど緊張する場だと思うのだが、わからないなりに言葉を選び、間違っても気になったことを言おうとしていた。これは、久留米シティプラザが劇場であり、いつもいる大学とは違う場所であるからこそ、いつもと違う自分になりやすかったということなのだろうか。学生が対話し、思索する姿は「すばらし」く、教員である筆者は「晴れがましい」気持ちになったのだった。

久留米大学御井キャンパスと久留米シティプラザは公共交通機関で30分以内の距離であり、学生の多くは、シティプラザからほど近い西鉄久留米駅を利用している。このような近くに芸術鑑賞をし、自らの内面を深く掘り下げる機会を持つ場所があることは幸運なことである。これからも久留米シティプラザとの連携を継続し、学生の輝くすがたを見続けていきたいと考えている。

参考文献：

清水真砂子『学生が輝くとき』岩波書店、2006年。

山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之 編『新明解国語辞典第八版』三省堂、2020年。